

MfG_J_Kote-E_self-made_picture_book

機那サフラン酒本舗の饅絵の紹介（自作の饅絵図鑑）

春日正利

0. はじめに

1. 饅絵の謎々
2. 饅絵蔵の饅絵の画像
3. 饅絵蔵・東面の饅絵配置のテーマ、移動の過程
4. 饅絵蔵、北面、南面の饅絵の絵柄
 - (1) 全体の配置表
 - (2) 北面、南面のグルーヒング（十二支と恵比須天と大黒天）
5. 蔵に込めた、祈りと仁太郎の生涯
6. 増築事務所の壁を、何故、こんなに飾り立てたのか

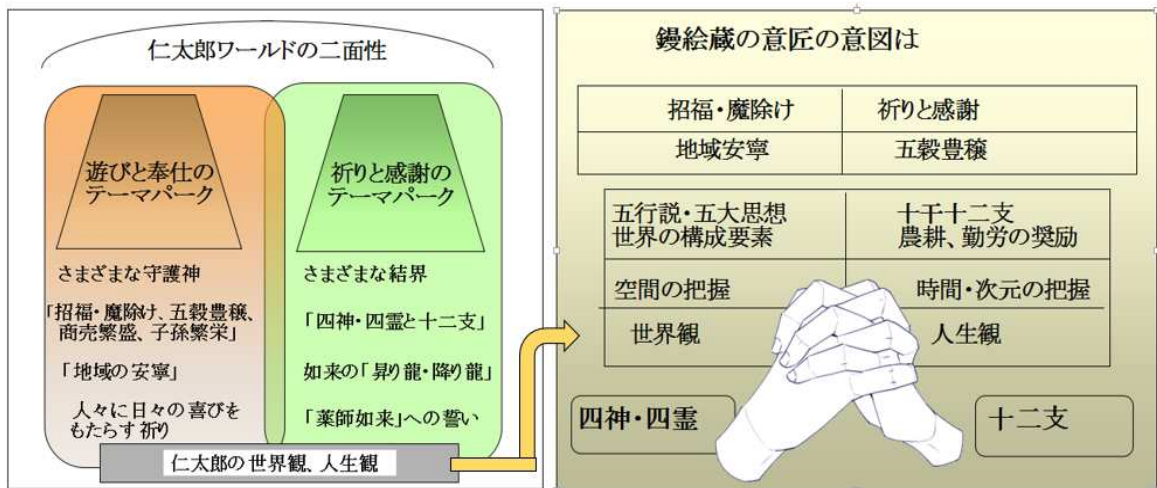
0. はじめに

「機那サフラン酒本舗の饅絵蔵や庭園・離れ」は、その美しさ、豪勢さに驚くだけでも、遠方から訪問されるゲストは満足なさるのでしょうが、もう一步踏み込んで、隠された謎々を解き明かすと、もっと楽しんでいただけるように感じています。

本論攷は、初めてサフラン酒本舗の饅絵を耳にする通法施聞の皆さま向けに、基本知識となるよう、整理したものです。

機那サフラン酒については、1990年代、観光ブームの時に出版された全国の蔵や饅絵の紹介本の中で、大半が「建物道楽、成金」という言葉で片付けられ、饅絵による造形技術の凄さへの言及も知る限り皆無でした。最近になり、創業者も大変な教養人だったとの評価が出始め、喜ばしい
機那サフラン酒については、1990年代、観光ブームの時に出版された全国の蔵や饅絵の紹介本の中で、大半が「建物道楽、成金」という言葉で片付けられ、饅絵による造形技術の凄さへの言及も知る限り皆無でした。最近になり、創業者も大変な教養人だったとの評価が出始め、喜ばしい
限りですが、まだまだ以前の低評価から抜け切れていません。

私は、この両極端とも云うべきゲストの印象の原因を考えてきまして、
 ようやく、仁太郎さんが創造した世界、仁太郎ワールドは、元来二面性を
 もつテーマパークともいうべきもので、細かく見ませんと、誤解しまいがちと、
 気づきました。まさに「美は細部に宿る」です。
 現在、抱いています『仁太郎ワールド』は言葉で説明すると長くなりますが、
 イメージにしますと下図の通りです。



次頁の図は、奈良・薬師寺の本堂に安置されている薬師三尊像です。
 この後ろに、十二支に呼応する十二神将が並んでいます。本尊の薬師
 如来の台座に、多くの守護神、または、その象徴が配置されているのです。
 それらは、まさに、不思議なほど、銀絵蔵の装飾と一致しています。
 以下の、銀絵の画題と薬師三尊台座の文様との類似は、春日の仮説です。
 でも、あまりに符合しており、偶然とは思えません。

そして薬師如来の、もうひとつのアトリビュートが、登り龍と降り龍です。
 機那サフラン酒本舗のあちこちに見られる龍の多くが双龍、
 その理由が、ここにあると推察しています。

お話ししたいことが、たくさんありますが、ここでは絵柄の意味の
 基本的なことのみ。

美しさ、製作方法などについては、ほかの「ガイドからのメッセージ」を
 ご覧ください。

奈良・薬師寺の本堂に安置されている薬師三尊像、如来台座

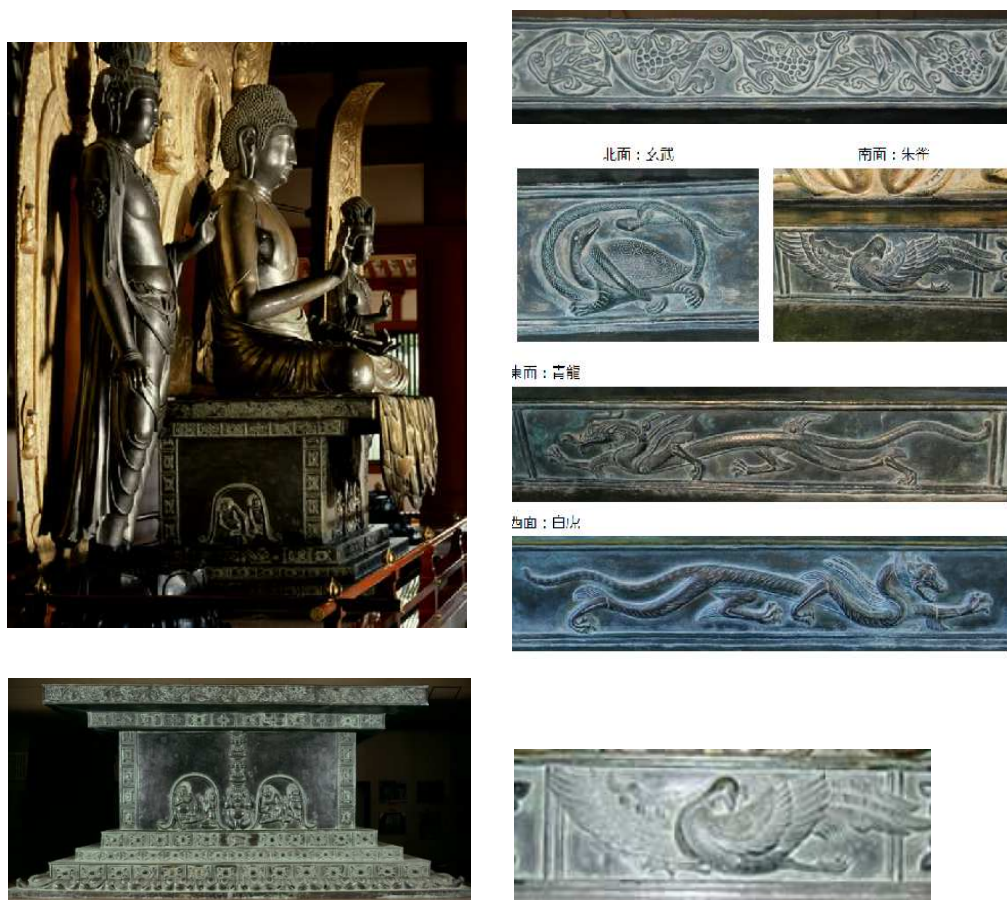


図 奈良・薬師寺の薬師三尊坐像と台座

饅絵蔵、そのほかの建物、庭園を含む、機那サフラン酒本舗の全ての作品は、薬師如来のあらゆるアトリビュート(属性)の具体化であり、守護神の具体化であり、周囲の人々全てに対する祈りと感謝と考えると、全て納得できるのです。

1. 鏝絵の謎々

鏝絵について、吉澤仁太郎は説明を一切残しませんでした。仁太郎は、贅沢に好き勝手に作ったという人もいます。しかし、私は、決して適当に作成されたものとは思えません。むしろ考えを重ねるほど、鏝絵蔵を含む屋敷の全部について、教養ある創業者が「趣向を凝らした謎かけ」をしているように思うのです。そのいくつかを、以下に、お示します。

- | | |
|---|-----------------------------|
| <p>(1) なぜ鏝絵蔵北面の寅に、縞がないのでしょうか。</p> <p>(2) 本当に申は、いないのでしょうか。</p> <p>(3) なぜ、事務所入口の冠木門に大黒様と「恵比須様」、事務所窓口に「鶴と亀」を配置したのでしょうか。</p> | <p>(疑問の分類)</p> <p>基本的疑問</p> |
| <p>(4) なぜ鏝絵に、四神、十二支の絵柄を選んだのでしょうか。これらに、なにか関連があるのでしょうか。</p> <p>(5) 鏝絵窓上のまぐさ部を飾る唐草模様の意味は何でしょう。</p> | <p>次の疑問</p> |
| <p>(6) なぜ、全ての鬼瓦に龍が二匹いるのでしょうか、鏝絵蔵の軒下にも龍が二匹なのでしょう。</p> <p>(7) なぜ朱雀ではなく、鳳凰なのでしょう。また、なぜ麒麟が登場するのでしょうか。</p> <p>(8) なぜ、衣装蔵の鏝絵は、鯉や小鳥、子供の寅なのか。</p> <p>(9) 東面の鏝絵の配置は、意味があるような、ないような。</p> <p>(10) 再三訪れた魚沼西福寺開山堂から、得たものは何か。</p> | <p>次の疑問
～その2</p> |
| <p>究極のなぞなぞ ～ 仁太郎ワールドを読み解くキーワード</p> <p>(11) この鏝絵の全てを、ひとつにまとめるものが有るのでは。</p> | <p>全体の
疑問</p> |

以下では、サフラン酒本舗の鏝絵の配置と意味を中心に、概要を述べます。個々の謎解きについては、サフラン酒本舗ウェブページの「ガイドからのメッセージ」をいただきたいと存じます。稀代の巨人・吉澤仁太郎の謎かけの不思議さをご覧ください。

2. 鍍絵蔵の鍍絵の画像



鍍蔵 軒廻り



鍍蔵 東面

鍍蔵 西面の
全面海鼠壁（全国で唯一か?）

⑧



⑨

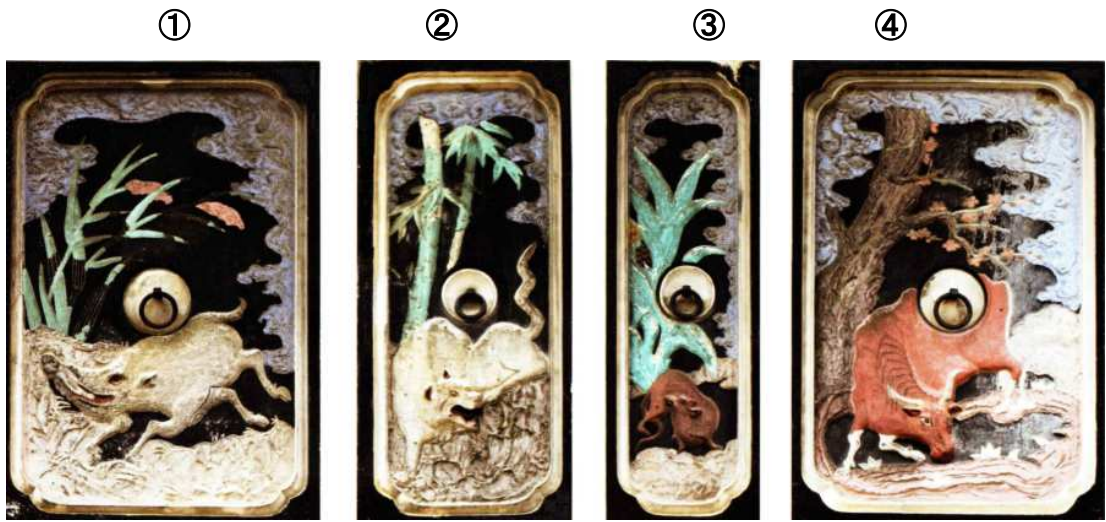


⑩



⑪





鏝蔵 北面



⑭ ⑮ ⑯ ⑰

鏝蔵の内部、冠木門と窓口

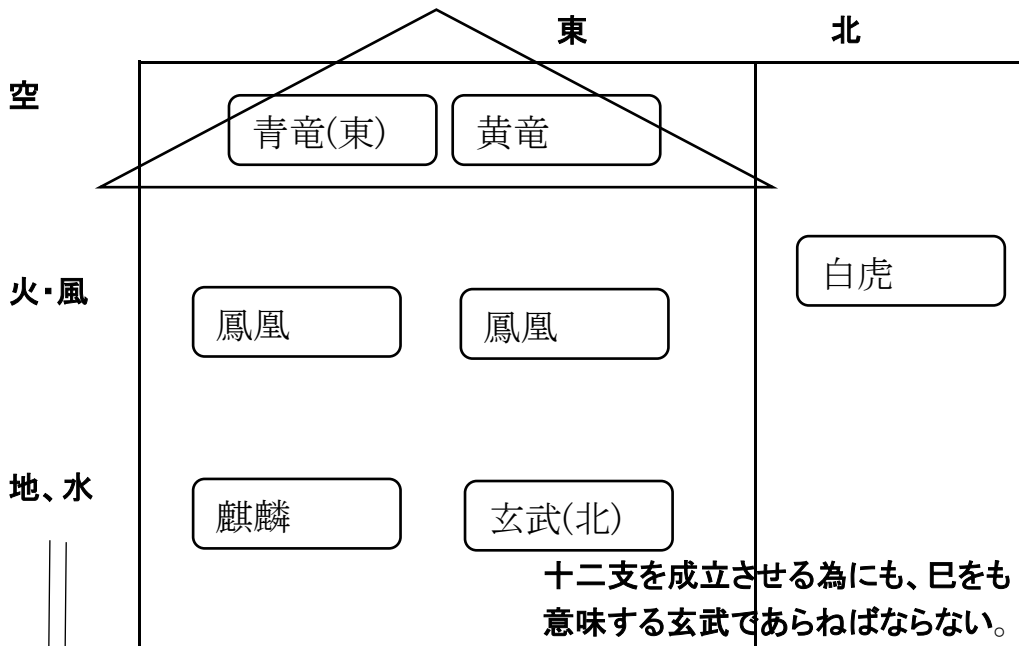
衣装蔵の鏝絵は省略

3. 饅絵蔵・東面の饅絵配置のテーマ、移動の過程

(1) 霊獣・四神と瑞獣・四霊の配置のテーマ

虚空に棲み、睨みを利かす青竜、さらに四方守護神の上の黄竜
 火のごとく力強く、風の如く自由に舞う鳳凰
 大地を自由に駆ける麒麟、水面を自由に泳ぐ玄武
 ～ 永遠の家業継続と発展、繁栄を祈る

サフラン酒の饅絵東面は、北面の十二支を併せて考えると、霊獣の四神のみでは説明が付きません。方位守護神・霊獣の四神と、瑞獣の四霊を兼ねた意味を持たせているように思えてなりません。(解釈の発端は寅に白虎を配したこと。)
 四神は、中国の神話、東の青龍・南の朱雀・西の白虎・北の玄武で、天の四方の方角を司る霊獣である。また、瑞獣の四霊(応竜・麒麟・靈亀・鳳凰)を四神と呼ぶこともある。四霊(しれい)とは『礼記』礼運篇に記される霊妙な四種の瑞獣のことをいう。麒麟は黄龍と同義。鳳凰は朱雀に対する。



サブテーマ1 東面
方位守護神の霊獣、瑞獣

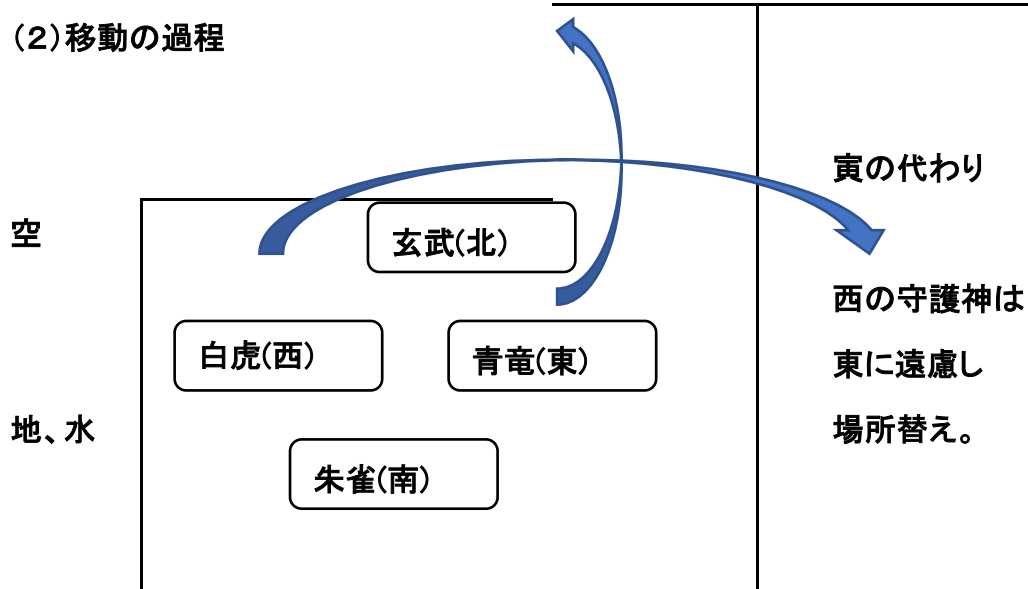
サブテーマ2 北面
農作物各季節の安泰と家業繁栄を祈る十二支 (南面の酉と卯、東面の辰と巳を合わせ、申を除く十二支)

サブテーマ3 階層
地水火風空の五大

東面 方位守護神の靈獸、瑞獸

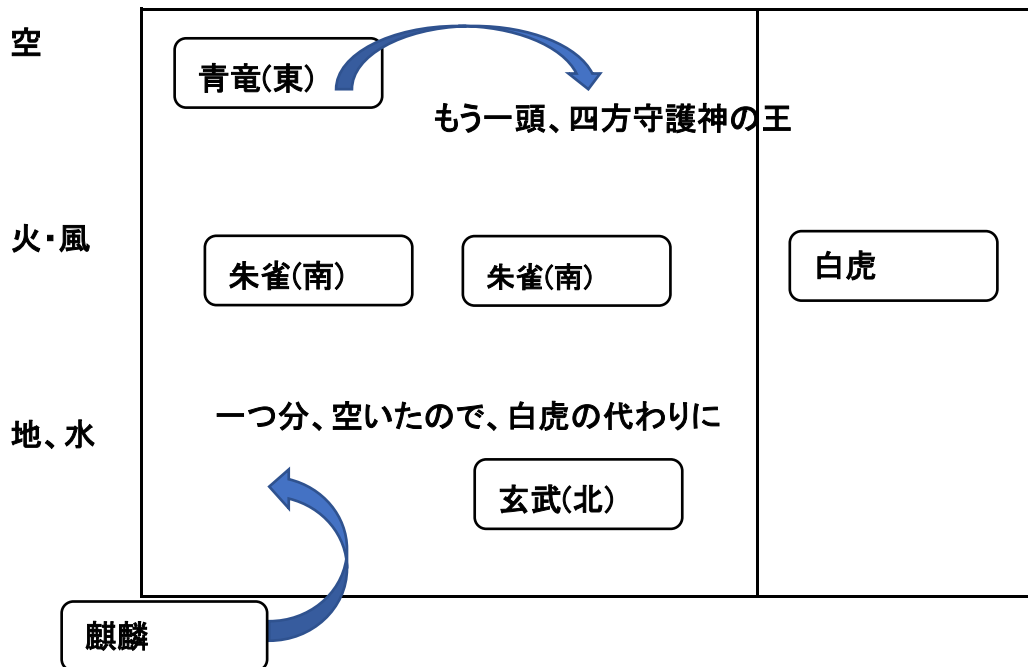
北面 家業繁栄を祈った十二支

(2) 移動の過程



東面 方位守護神の靈獸、瑞獸

北面 家業繁栄を祈った十二支



五大思想をも含む、吉澤仁太郎さんの、底知れない教養とユーモアセンス、これしかないという配置の妙だと思うのです。金持ちのゴテゴテ趣味なんていう人は、もつたいないものを見逃しているのです。

4. 饅絵蔵、北面、南面の饅絵の絵柄

(1) 全体の配置表

北面、南面の外の十二支は、もとは穀物の十二月、五穀豊穡を表現。

十二支は中国、韓国、その他のアジア諸国でも、伝えられています。

主屋土間からの冠木門の恵比寿と大黒も、五穀豊穡に繋がる農林漁業。鶴と亀は長寿と思います。

		北面 ①、②③、④ 二階 ⑤、⑥、⑦ 一階
①亥(いのしし)とススキ 亥は田や作物の神様。	②寅と竹 始まりを表わす縁起のいい動物。 実は白虎か。	東面 ⑧⑨ 二階 ⑩、⑪ 一階
③子(ねずみ)とオモト 子は子孫繁栄の象徴。 萬年青は新築・改築・引越しのときに飾るとよいとされる植物。	④丑(うし)と紅葉 丑という文字には、ひとつのことが終わり新しいことが始まる「転換」の意味がある。	南面 ⑫⑬ 二階 一階の奥⑭と⑮ 屋内南面⑯と⑰
⑤午(うま)と桜 桜はさくら肉からの連想か。	⑥戌(いぬ)と牡丹 戌はお産が軽いため安産祈願の動物とされている。 金銀財宝を象徴する動物でもある。 南総里見八犬伝の八犬士。仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の数珠玉を持ち、牡丹の形の痣を身体のどこかに持っている	
⑦未(ひつじ)と芭蕉 未の饅絵は珍しいらしい。ここ岡山県津山市の二か所のみ。逆に、あちこちにある?	土蔵東面の軒廻り、周囲の開口部のまぐさ部、塗戸に饅絵。まぐさ部は、開口部の横材。 東面の軒廻りには、二匹の大きな龍で、青竜、白虎、朱雀、玄武の四獣を従える黄龍と考えると、話が通る。	
⑧鳳凰(左) 正面・上 鳳凰は瑞獣(瑞兆があるときに姿を現すといわ霊獣)とされる。	⑨鳳凰(右) 正面・上 鳳凰が降りるときは「聖天子の出現」を表わすとか。ちなみに鳳凰の頸部は巳(蛇)。鳳凰は朱雀でもある。	
⑩麒麟 正面・下 鳳凰と並び、瑞獣のひとつとされる。麒麟が姿を現わすのは「王が仁政を施すとき」とされる。黄龍と同義。	⑪玄武(亀) 正面・下 干支の巳(蛇)は、古代中国では龍と区別されず、水神である。 東西南北の順に、青竜、白虎、朱雀、玄武が守護。	
⑫酉とりと菊 南壁面 酉は穀物の収穫(とりいれ)の象徴で、それが転じて「福を取り入れる」という意味を持つようになった。正月を祝う。	⑬卯うさぎ 南壁面 卯は五穀豊穡を司る。一緒に描かれている植物は不明。形からして松か杉らしい。	

⑭恵比須 一階の奥 七福神の恵比須様が鯛を釣るという、めでた取り合わせ。い商売繁盛、五穀豊穡を表わす。	⑮大黒天 一階の奥 七福神のひとつで、食物、財福の神。打ち出の小槌で小判を降らすという景気のよい図柄。
⑯二羽の鶴に松 屋内南面	⑰鶴と亀 屋内南面 波も見事。

(2)北面、南面のグルーピング (十二支と七福神・恵比須天と大黒天)

北面二階		
猪 寅、虎 子、ねずみ 丑、牛	田の神、作物の神、無病息災 はじまり、決断力と才知 子孫繁栄、財 粘り強さ、転換、堅実、誠実	商売繁盛 新築にあたり決意

北面一階		
午、馬 戌、犬 未、羊	豊作、健康 安産、安全、防御、忠誠、献身 作物が実る、安泰	子孫繁栄、家運隆盛

南面		
酉 とり 穀 卯 うさぎ	物の収穫、福を取り入れる 五穀豊穡	

七福神 恵比須天と大黒天		
恵比須天	七福神中で唯一の日本の神様。 左手に鯛をかかえ右手に釣竿を持った親しみ深いお姿の、 漁業の神で、特に商売繁昌の神様としても信仰が厚い。	
大黒天	大黒天は、大国主命と神仏習合したものである。 大地を掌握する神様(農業)でもある。大きな袋を背負い、 打出小槌をもち、頭巾をかぶられた姿が一般によく知られていて 財宝、福德開運の神様として信仰されている。	
毘沙門天 弁財天 福祿寿 寿老人 布袋尊	鶴と亀の鍔絵は、長寿の寿老人を暗示するか	

5. 蔵に込めた、祈りと仁太郎の生涯

衣装蔵、饅絵蔵に込めた願いと感謝

(吉澤仁太郎の世界、「仁太郎ワールド」の もうひとつの解釈)

みなさん、長岡市摂田屋にあります、機那サフラン酒本舗の饅絵の豪華さを、お聞きになった方もおられると思います。もしかしたら、薬用酒の製造販売で財をなした金持ちのゴテゴテ趣味、なんていうコメントを見かけた方も、おられるのではないのでしょうか。でも、単なる成金趣味とみると、そこに潜む、見落としてしまうものがあるかも知れません。ここでは、そんなお話をします。

見学に来られるゲストは、だいたい、門の入り口の正面の饅絵蔵の饅絵、そして主屋を見物の後、案内のスタッフについて、奥に広がる賓客接待専用で作られた庭園、離れを見学されます。もちろん、この順で回っても、その素晴らしさを充分ご覧いただけるのですが、それだけですと、創業者の吉澤仁太郎の、家運隆昌を祈った想いに気づかれないように思います。40年近くに渡る施設建設の順番に着目すると、仁太郎の「別の」想いが、みえてくる気がするのです。

その1 主屋建造、増築当時 [明治27年(1894)、大正2年(1913)] (写真A)

鬼瓦に据えた龍に託した「守護神、火防」が中心で、その龍に招福の霊力も期待しました。

その2 最初の饅絵の蔵、衣装蔵建造当時 [大正5年(1916)]

鬼瓦に龍、そして、八枚の饅絵には、東面に鯉の滝登りと鳥、北面に玄武と白虎を配しました。饅絵蔵のような、四霊獣(青龍、白虎、朱雀、玄武)をもって東西南北の守護神とする考え方が、既に、しっかりと現れています。はじめて作った饅絵の一部に、あえて、将来の龍を予見させる滝を昇る鯉、そして明日の鳳凰を思わせる小鳥を配したところに、まだ五十代、もっと商売を伸ばすんだ、いま見ている、という気持ちが見え隠れします。そして次の蔵の建造も、饅絵の図柄も、このとき既に決めていた、飛躍への覚悟としか、思えないのです。

その3 饅絵蔵建造当時、大正5年起工から大正15年(1926)竣工の間 (写真B、C)

摂田屋で商いを始めてから二十年あまり、順調に家業が延びてきたことへの感謝と、更なる繁栄を祈念する気持ちから、五行思想にもとづく東西南北の四霊獣、めでたい四瑞獣(応龍、麒麟、鳳凰、靈亀)、そして穀物の十二カ月で五穀豊穡を暗示する十二支を配そうとしたと考えられます。すなわち、龍とその他のメンバーで、地域安寧、五穀豊穡、商売繁盛、子孫繁栄を念じ、さらに土蔵の入口部分では、商売繁盛と人間の徳の二つを暗示する聖人、更にめでたい鶴亀で招福と長寿を願ったのです。まさに守護神、招福、魔除けを、蔵の四方と内外を飾る饅絵に込めたと云えると思います。そして、それらは、見ている人々にも、注がれるのです。

その4 離れ、庭園建造 [昭和6年(1931)] 写真D、E、F(庭園、離れの龍、猪の目)

家業が繁栄してきました。今後も末永く続き、守っていききたいという祈りからと思いますが、庭園では巨石、銘石のもつパワー、とりわけ浅間山の溶岩の持つ火山の膨大なエネルギーに、そして離れでは巨木、銘木のもつパワーと細工の巧妙さに、それぞれ魔除けと招福を託したのでは、と見てとれます。離れのガラス窓の猪の目、庭園の不動明王をはじめ、随所に魔除けや龍に絡めた祈りと感謝が溢れ、それらは全て、まず最初に、お客様に振り向けられています。

このように、サフラン酒の敷地は、地域安寧、商売繁盛、子孫繁栄の祈りに満ちた空間なのです。また、鰻絵蔵の内外の鰻絵、軒下の1枚を含め計18枚の配置も、絶妙なんです。地・水・火・風・空の五大思想に、四霊獣、四瑞獣の五行思想とを併せて考えると、東面の鰻絵の配置は、この配置しかないという、実に見事な、絶妙の対応・配置であることに、気づかされます。会心の配置に、「どうらね、わかったかね。」と云わんばかりの仁太郎さんの笑顔が、見えてくるような気がするのですが、如何でしょうか。



写真 A



写真 B



写真 C



写真 D



写真 E

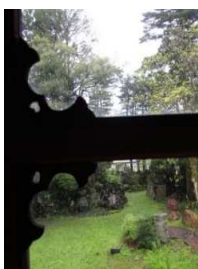


写真 F



補足 龍について

仁太郎は、龍に特別の想いを持っていたようで、かつて機那サフラン酒の屋敷には、龍が38匹も、いたそうです。もともと火防の意味もあるのですが、その龍が多くいるわけには、魚沼の西福寺開山堂の石川雲蝶作による「道元禅師猛虎調伏の図」を繰り返し見たという仁太郎や後に鍔絵を製作する伊吉の体験が、もとになっているという見方もあります。

構図を決めて名人・雲蝶に彫刻絵画の装飾を施させたのが、幕末当時の西福寺方丈、大龍和尚です。和尚は、前住職の志、この雪深く貧しい農村地域の人々の心の拠り所となるお堂を建てたいという願いを引き継ぎ、お釈迦様や道元様の教えこそが人々の心を豊かで幸せに導いて下さると信じ、この開山堂にも道元様の世界を再現したいと考えて、雲蝶さんに託したといえます。

仁太郎の鍔絵の図も、雪深く貧しい農村地域の人々の心の拠り所として、「暗く重たい冬への反発」ではと、思いやりの心で表現される研究者もおられます(*1)。屋敷の周囲に住む、日々の厳しい暮らしに生きる人々への、仁太郎の、心からの励ましです。私も、単なる火防やお守りのみならず、仏法の守護、そして人々の心を豊かで幸せにという、強い祈りが、鬼瓦をはじめ、龍、あるいは龍を暗示させる図像を、屋敷内のあちことに配置したのでは、という側に立ちたいと思います。

(*1) 建築史がご専門の、藤森照信先生、「建築探偵神出鬼没」,朝日新聞社(1990)

補足 申について

『ここには、サルはおりません。縁起の悪い「去る」に通じるからです。』という人もおりますが、私は、サルは、いるという側に立ちたいと思います。

十二支のものは、穀物の十二カ月の種籾撒きから生長、開花、結実、収穫を意味するとされ、1つ欠けても、毎年続く五穀豊穡のサイクルができません。ですから、この鯉絵蔵の十二支も、全て揃っている筈と思うのです。まして、サフラン酒にご来店され、鍔絵をご覧になるお客様の中には、申年生まれの方もおられるでしょう。お客様を大事に思う仁太郎さんが、そのような、お客様をションボリさせることを、する訳がないのです。では、辰、巳、そして申は、どこにいるのでしょうか。でも仁太郎さんは、これについて、何も残していません。仁太郎さんの謎かけでは、と思っています。もしかしたら、私は、有力な答えを見つけたかも知れません。既に訪問された方も、そんな見方で、もう一度ご覧になっていただき、招福、魔除けの祈りを味わっていただきたいのです。

6. 増築事務所の壁を、何故、こんなに飾り立てたのか

鰻絵の製作に取り掛かる前、雲蝶さんの巨大彫刻を見に、長岡から南に30キロほどの魚沼・西福寺開山堂の「道元禅師猛虎調伏の図」を再三、訪れたとされています。江戸末期の木彫りの名人、越後のミケランジェロとも呼ばれています、石川雲蝶の代表作です。

仁太郎さん、伊吉さんは、この図の何を手本にしたかったのでしょうか。江戸の末期、西福寺・方丈の蟠谷大龍和尚は、この雪深く貧しい農村地域の人々の心の拠り所となるお堂を建てたいという前住職の志を引き継ぎ、この開山堂にも、人々の心を豊かで幸せに導いて下さるお釈迦様や道元様の教えの世界を再現したいと考え、名工雲蝶の名を聞いて、ぜひに、と懇願したと云われています。

「道元禅師猛虎調伏の図」の前に、仁王像の製作を依頼したのですが、それは頻繁に起こる魚野川の氾濫を鎮めるために、当時、三条・本成寺で腕を振っていた雲蝶に彫刻を依頼したものです。その完成の見事さに感動した大龍和尚が、この人なら、新築の開山堂を飾る道元の彫刻も、人々が楽しめる、いいものにしてくれそうと、決断したのでしょうか。

西福寺の図も、よく見ますと、一番大きく描かれているのは「龍」です。仁太郎は、龍に特別の想いを持っていたようです。私も、単なる火防やお守りのみならず、仏法の守護、そして人々の心を豊かで幸せにという、強い祈りが、鬼瓦をはじめ、龍、あるいは龍を暗示させる図像を、屋敷内のあちこちに配置したのでは、という側に立ちたいと思います。仁太郎の鰻絵の図も、雪深く貧しい農村地域の人々の心の拠り所として、「暗く重たい冬への反発」ではと、思いやりの心で表現される研究者がおられます(*1)。確かにそうです。

当時は、薬種造りの繁忙期には、周辺農家の手助けを頼りにしたことと思います。近隣農民の手助けで、商売が成り立っていたのです。そういった時代だからこそ、屋敷の周囲に住む、日々の厳しい暮らしに生きる人々への、仁太郎の、心からの励ましと日頃の協力への感謝のように思えるのですが、如何でしょうか。